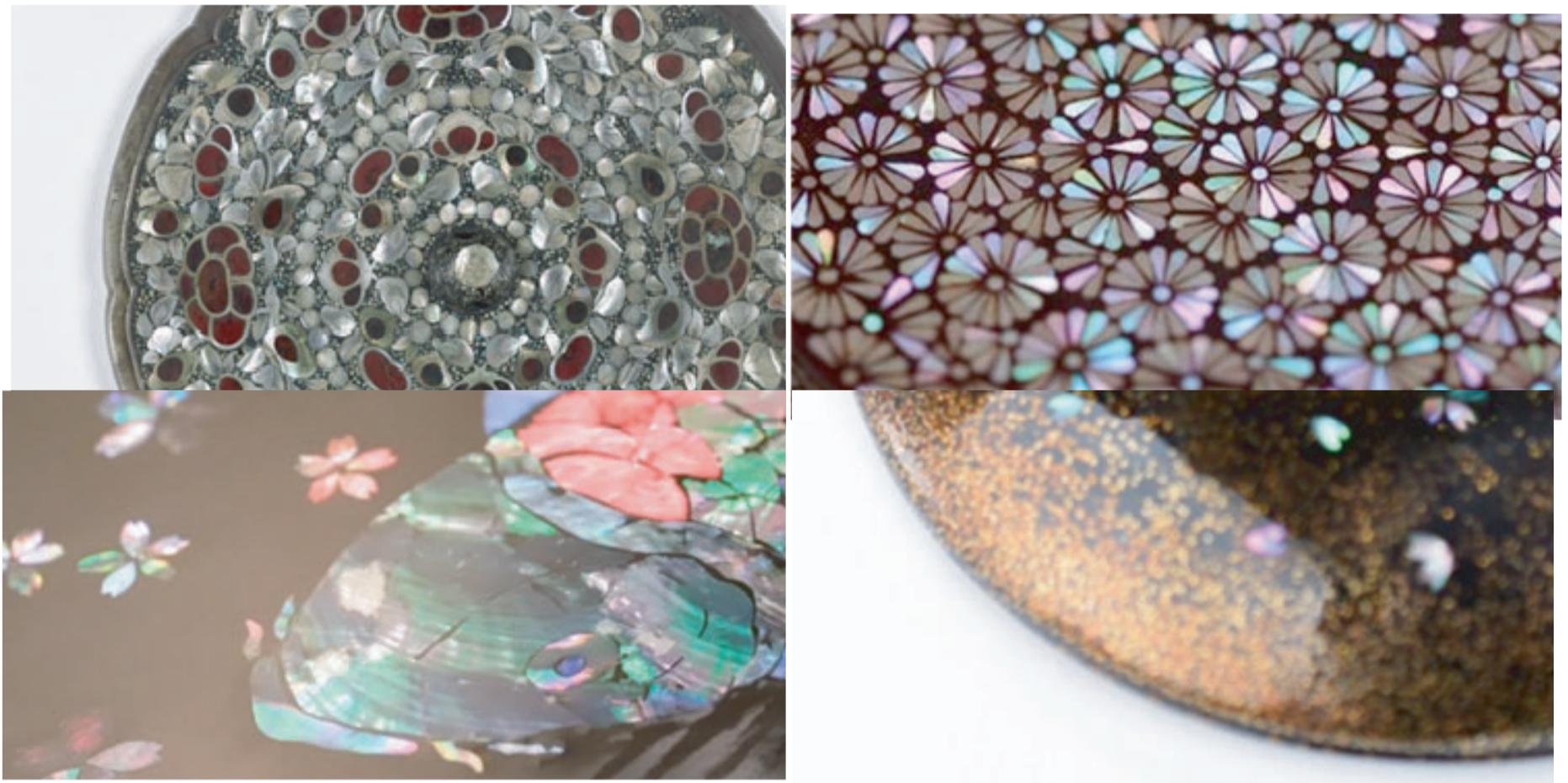


鱗を用いた螺鈿技法の研究

滝本研究室（インテリア・プロダクト分野）A22AB027 大橋香澄

はじめに

本研究は、魚の鱗という身近でありながらも普段は廃棄される素材に着目し、その持つ光沢や透明感を活かした新たな表現の可能性を探るものである。



研究の目的

本研究は、魚の鱗の活用方法を明らかにすること、魚の鱗をインテリア素材として再定義し、その特性を活かした空間演出方法を探求することを目的とする。

研究の方法(技法実験)

鱗の特性や見え方を把握するため、螺鈿技法をもとにした4種類の技法実験を行った。

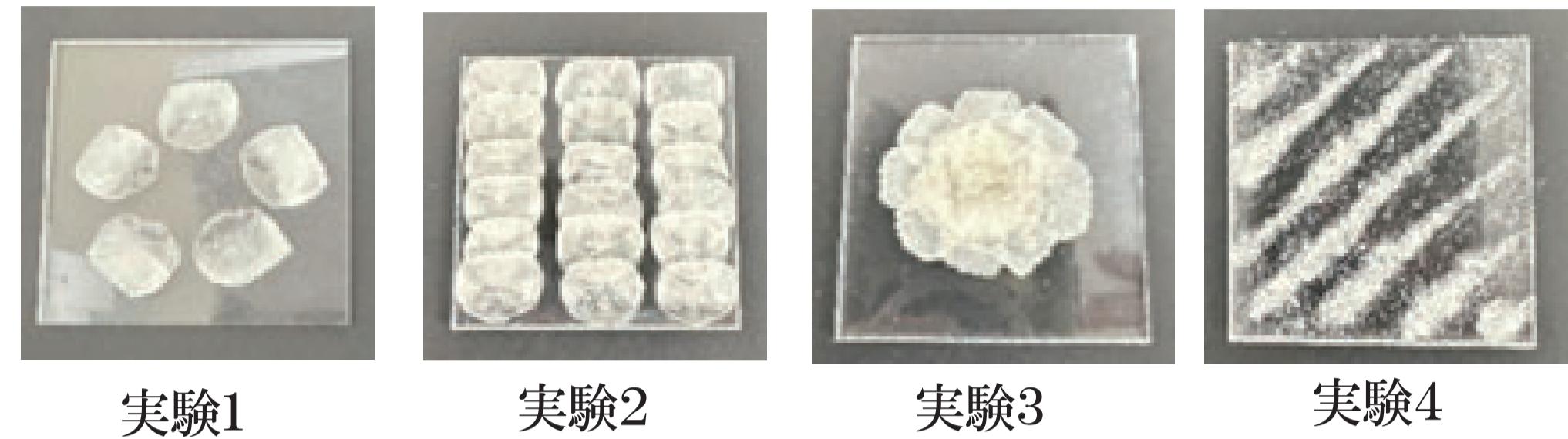
実験 1：置貝法：鱗を重ねず花の形に配置

実験 2：平螺鈿：鱗を敷き詰めて構成

実験 3：きりばめ螺鈿：花びら状にカットした鱗を配置

実験 4：蒔貝法：鱗を粉碎し、パウダー状にして使用

これらを通して、鱗は「貼り方」「下地」「光の当たり方」により見え方が大きく変化する素材であることが確認された。



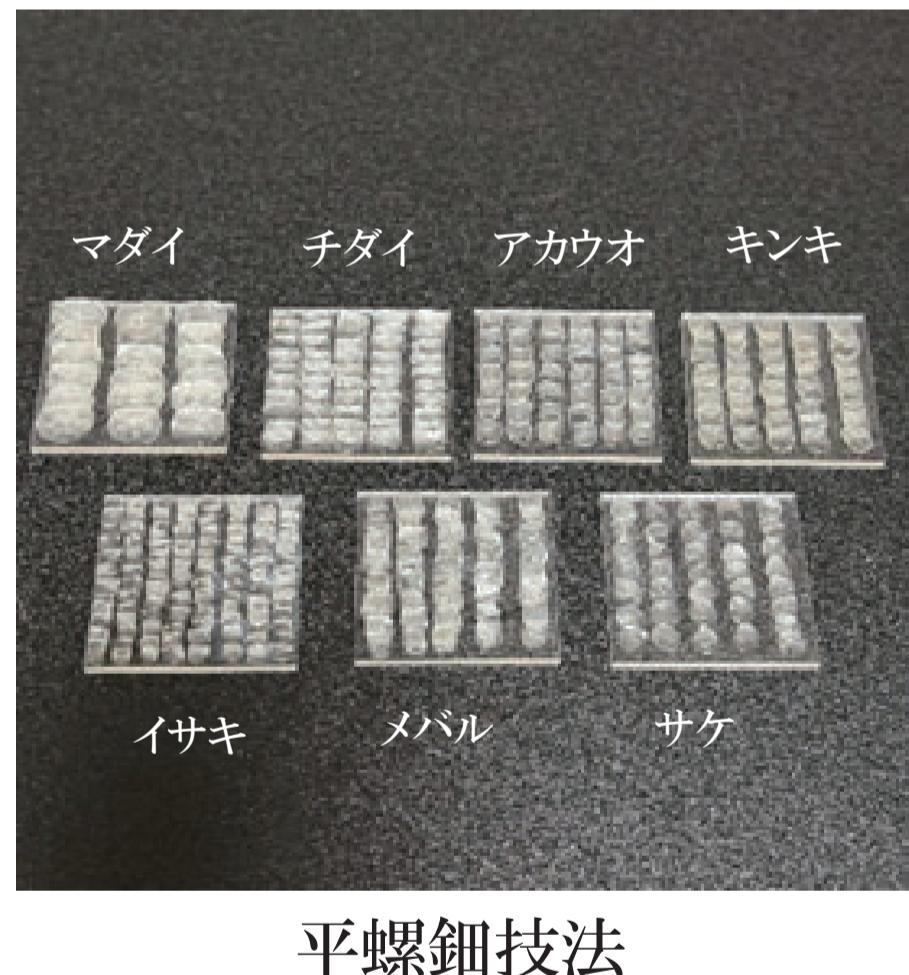
本制作

各技法を 5cm×5cm のパネル上で異なる魚種別（マダイ・チダイなど）で制作し、光の当たり方や魚種ごとの見え方を比較した。

【技法別】

上段→マダイ、チダイ、アカウオ、キンキ

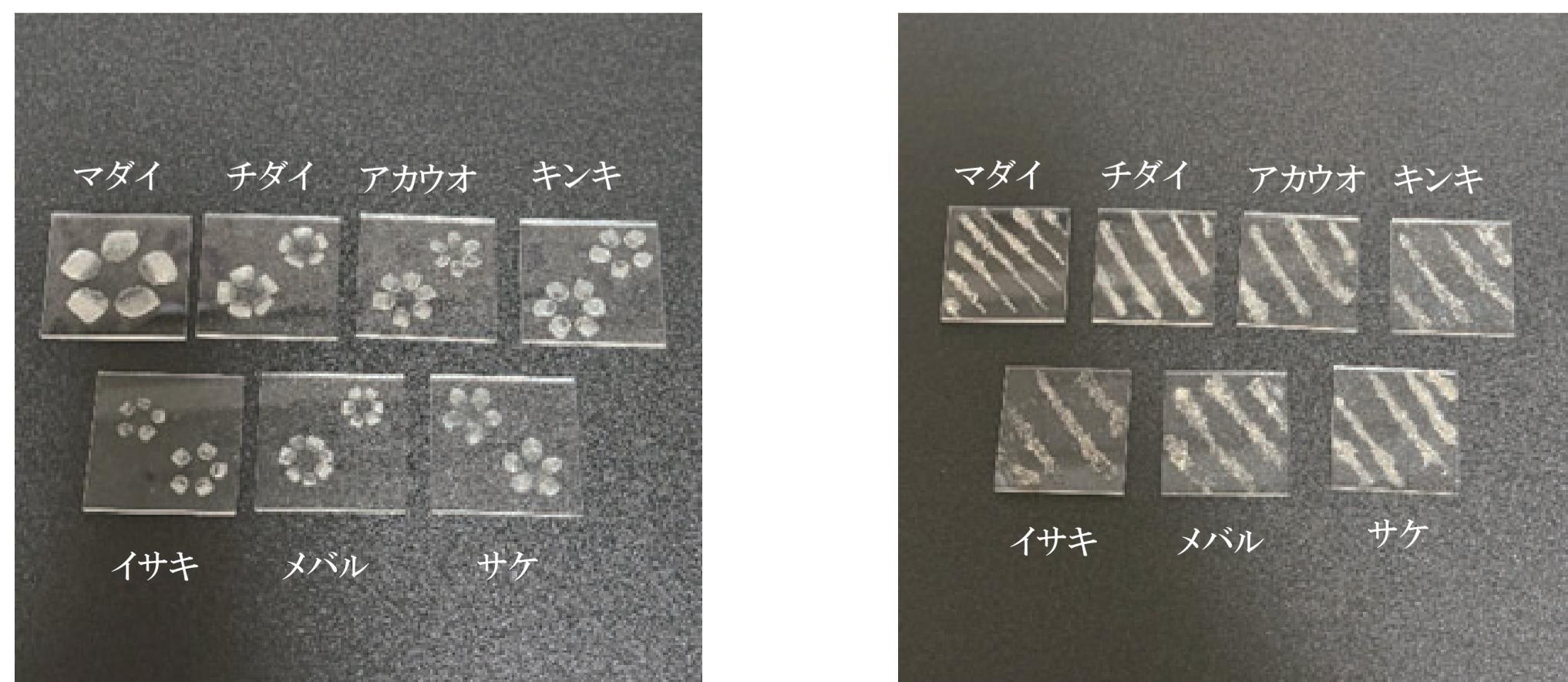
下段→イサキ、メバル、サケ



平螺鈿技法

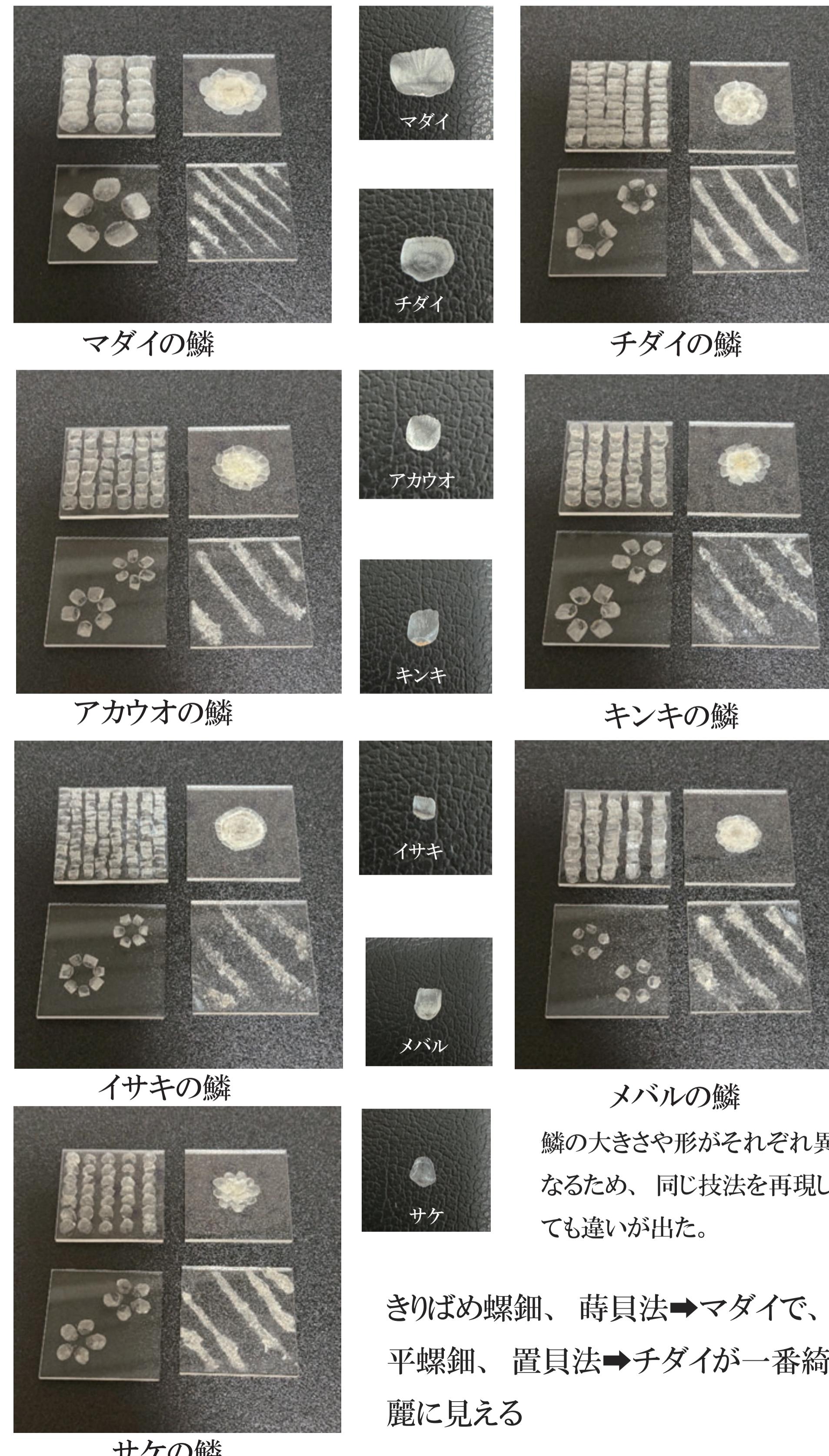


置貝法



蒔貝法

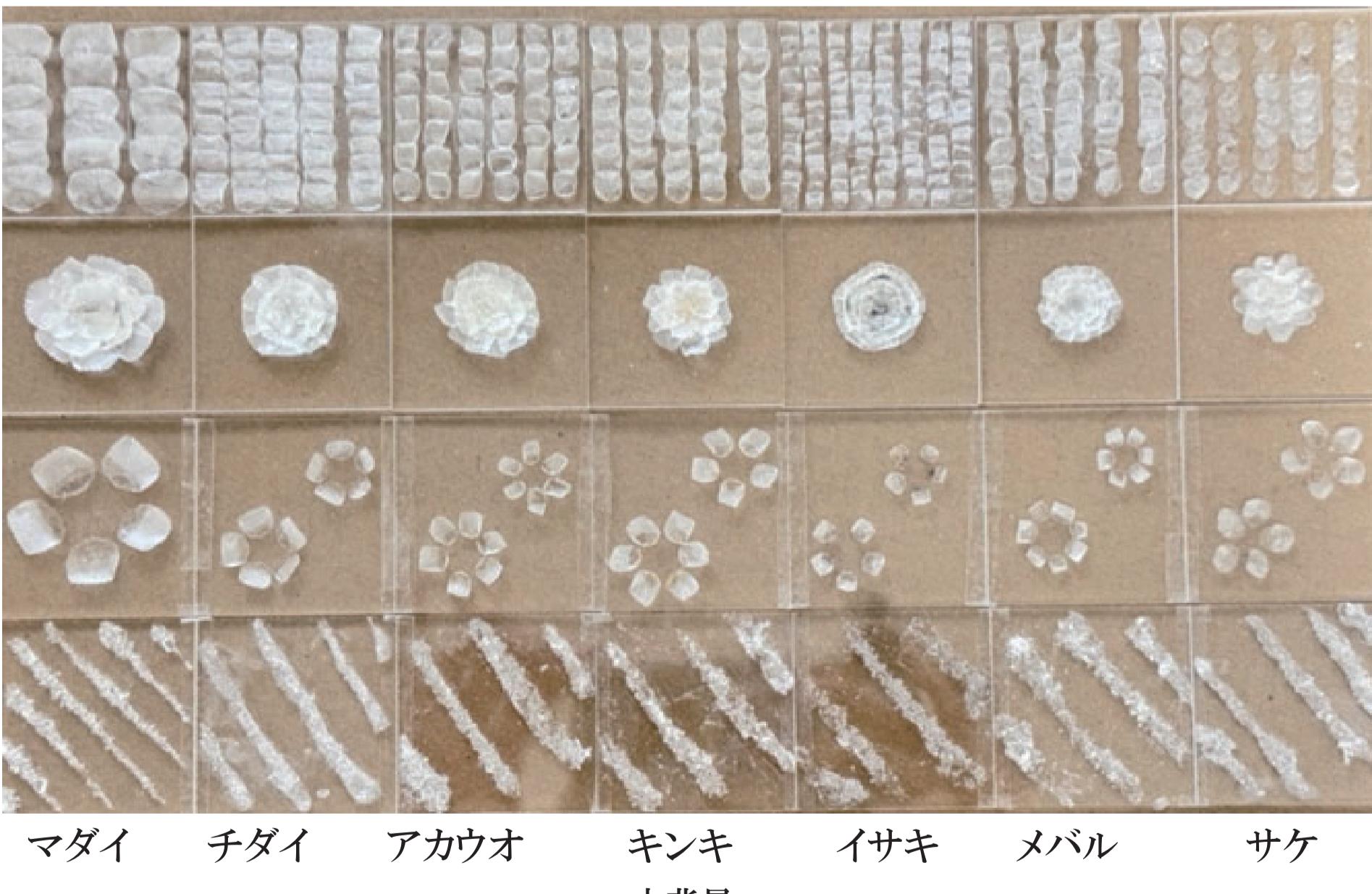
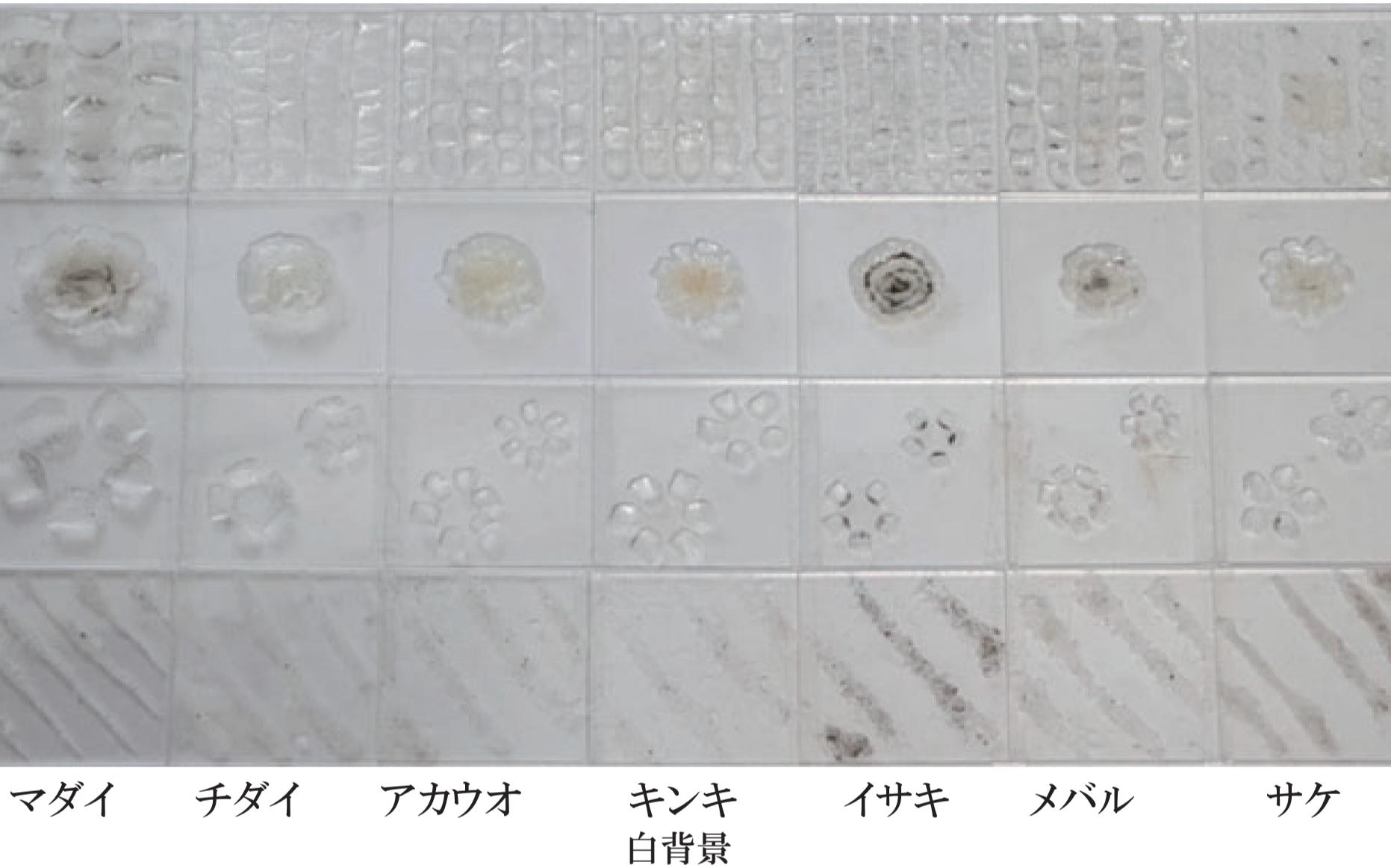
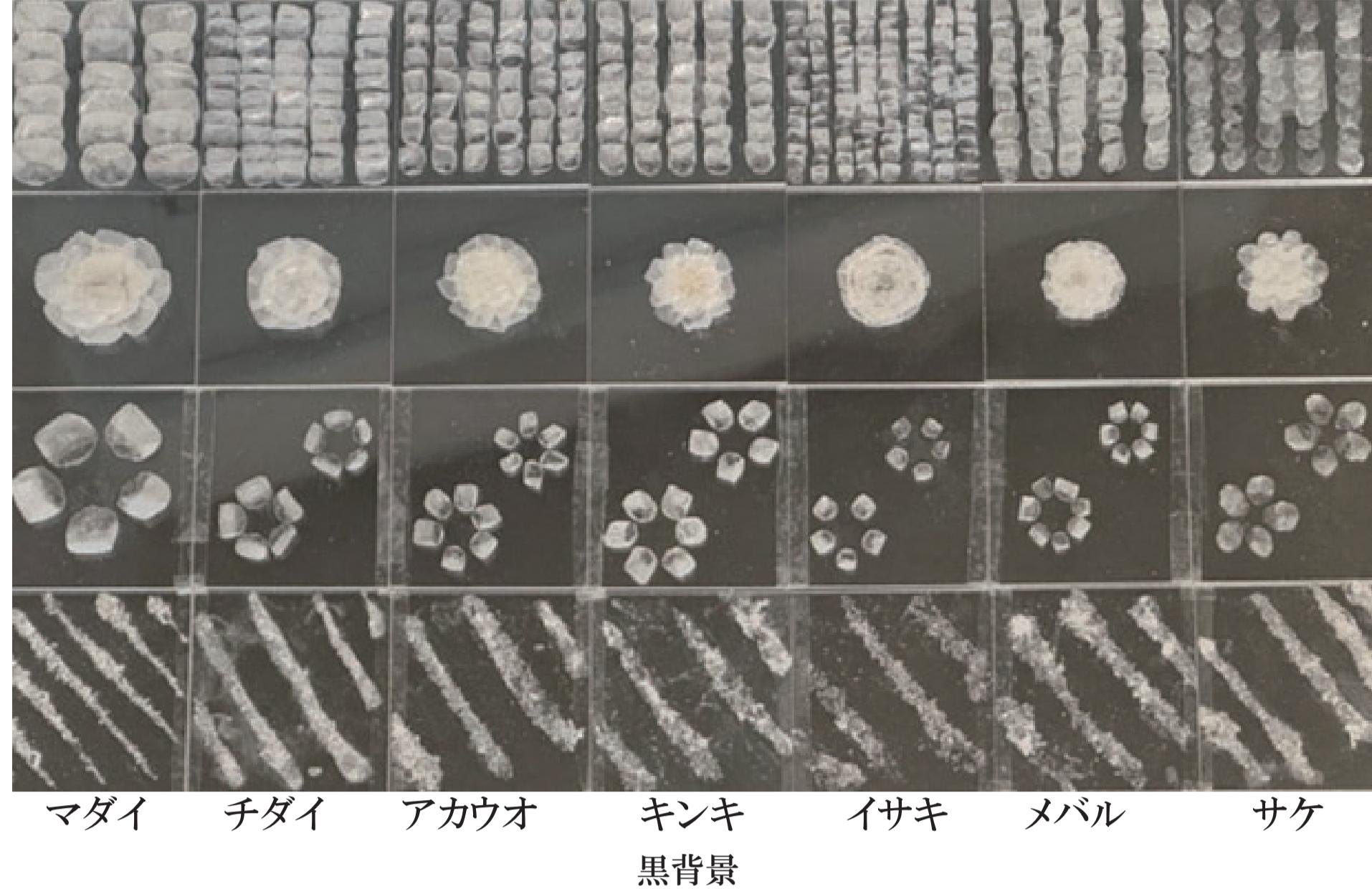
【魚種別】



きりばめ螺鈿、蒔貝法→マダイで、
平螺鈿、置貝法→チダイが一番綺麗に見える

鱗の大きさや形がそれぞれ異なるため、同じ技法を再現しても違いが出た。

【全体比較】下地を変えたときの見え方



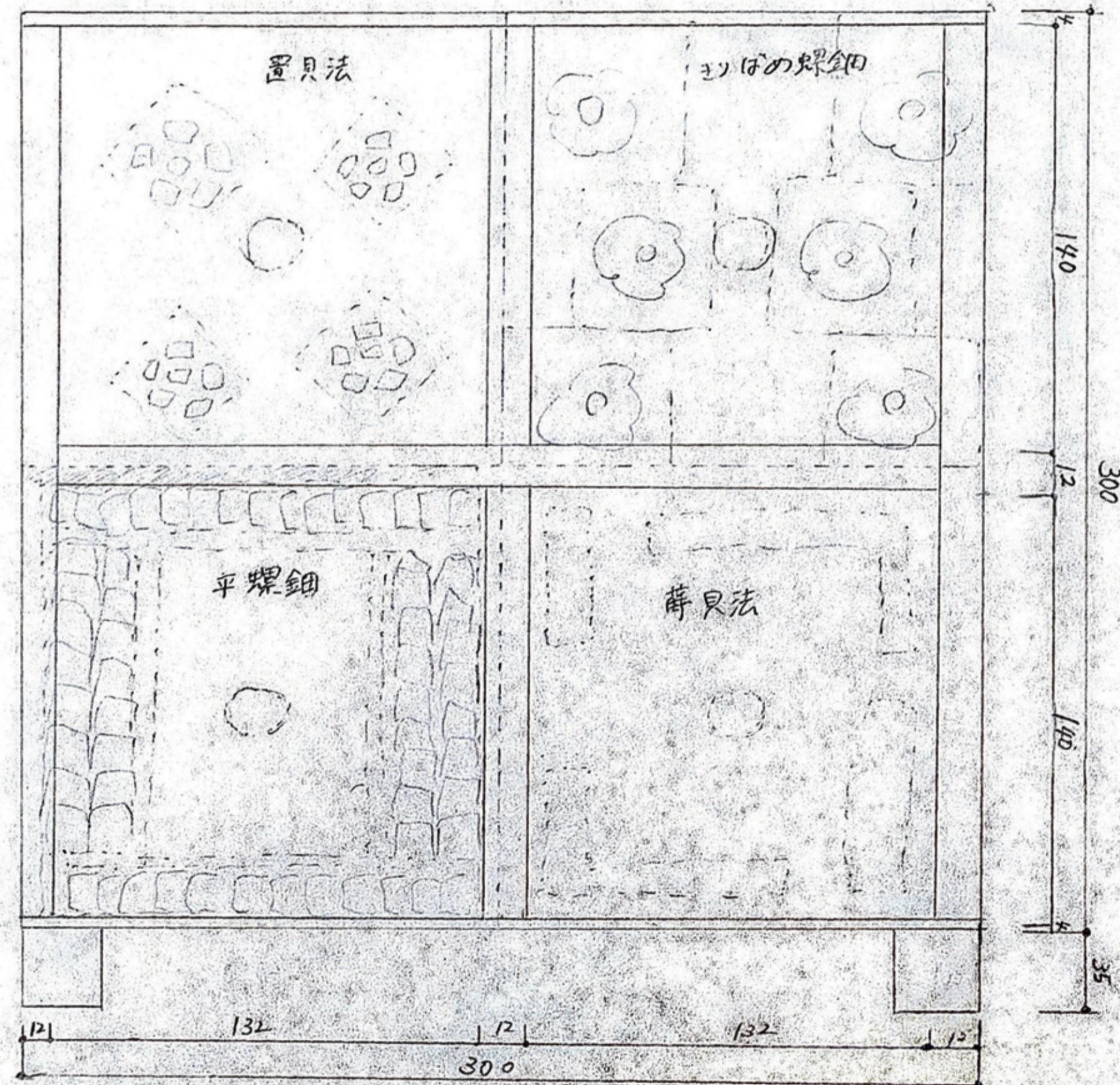
総合して、螺鈿を表現するには黒背景が最も適しているといえる。同一の技法を適用して、魚種で違いがみられたのは鱗の大きさ、形状、厚み、透明度光沢など、素材特性が異なるためである。

このことは螺鈿技法が素材の個性を生かす性質を持つ技法であるとうなづけている。そして、魚の鱗を用いる場合は、魚種ごとの特性を整理し、活用していく必要があるといえる。

適用例

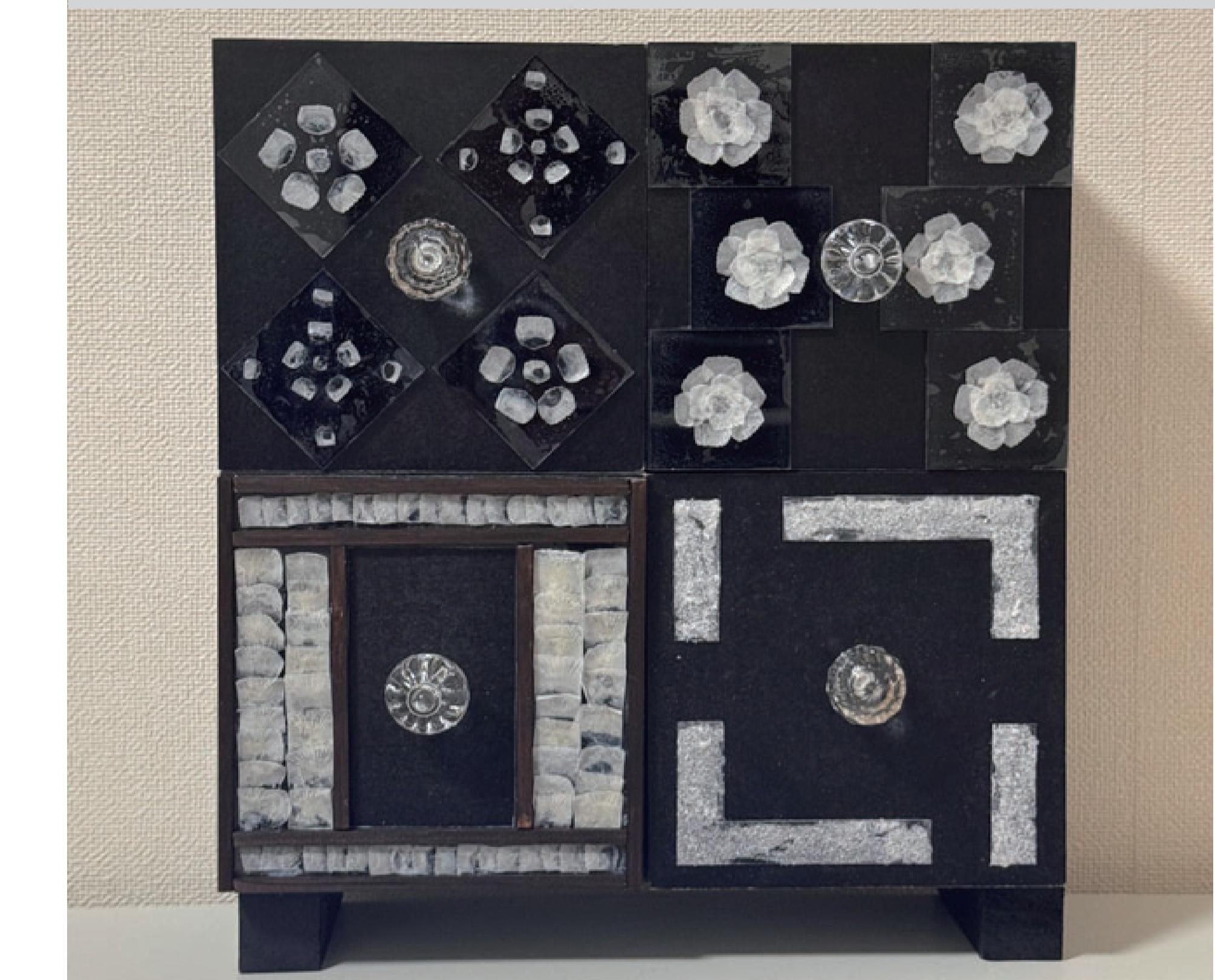
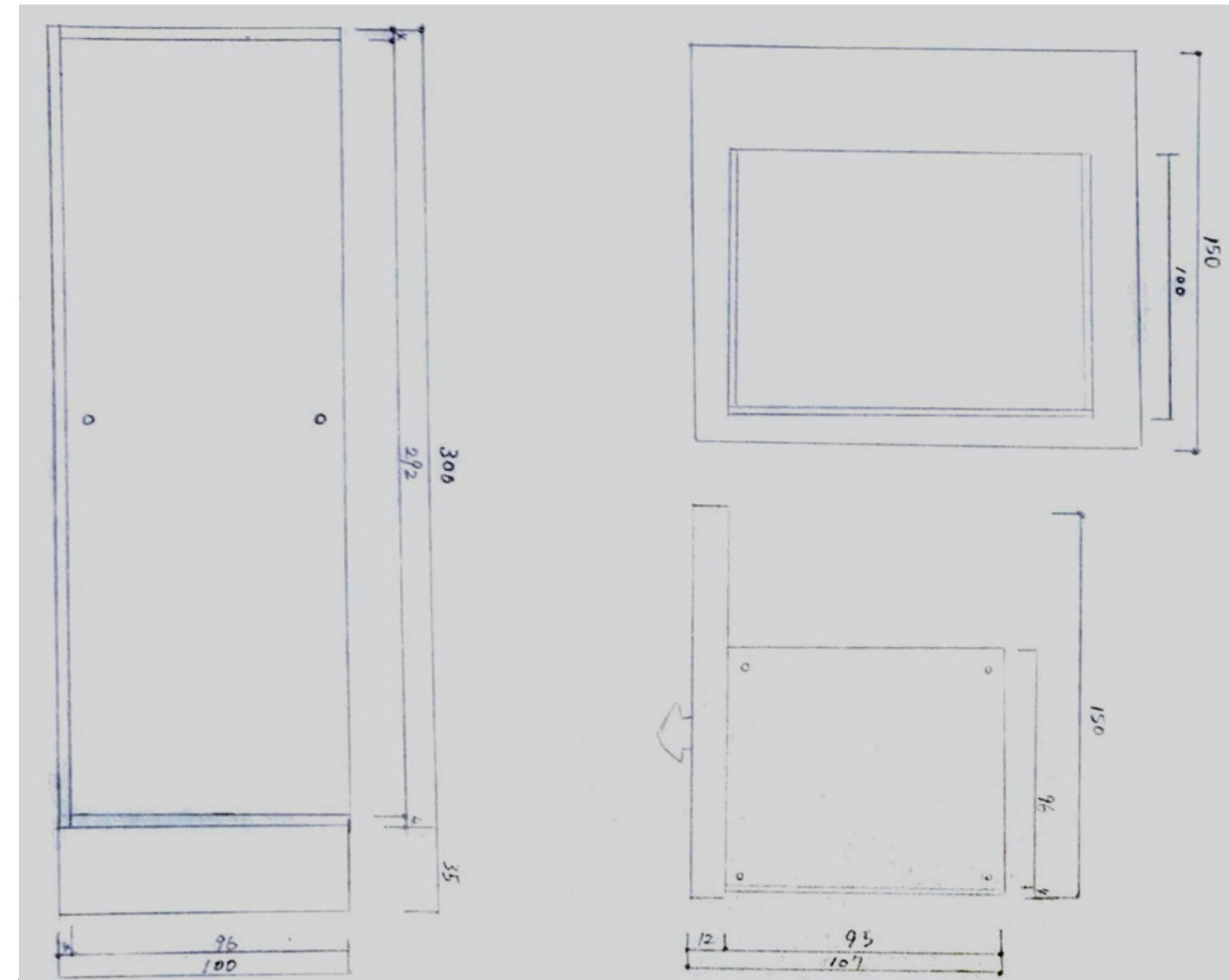
試作段階で検証した4種の螺鈿技法をひとつの構造体(ここでは棚)としてまとめ、螺鈿の技法として落とし込んだ。破棄される魚の鱗という素材の新しい価値を生み出した。

四分割にした引き出しの前板に技法を行った。1段目左→置貝法、1段目右→きりばめ螺鈿、2段目左→平螺鈿、2段目右→蒔貝法である。使用する鱗は、実験結果から一番綺麗だったタイの鱗を採用した。木材はMDFを使用した。



設計図 1/2

黒い下地に白い鱗を配置することで、鱗の存在が際立って見え、重厚感も増し、作品としての完成度が高まったように感じられた。一方で螺鈿特有の虹色の干渉色はやはり再現が難しく、鱗による反射はあくまで白く淡い光で想定していたようなきらめきを得ることはできなかった。



最終成果物

まとめ

4つの技法(置貝法、きりばめ螺鈿、平螺鈿、蒔貝法)を一化した棚の作品としてまとめ、木材とアクリルを鱗という異色な組み合わせにより、鱗をインテリア素材として再利用することが可能であることが明らかになった。鱗の特性をより明確に引き出すことができ、研究の目的を達成できた。